

第7回林雅子賞は「時間」をテーマにした斎場・墓地案

日本女子大学住居学科卒業・修士制作の公開選定会

「アスブルンドを超える案」「いや、ストーリー性を狙った卒展の常套手段」。選定委員の間で、最後まで物議を醸しつつ、「第7回林雅子賞」に輝いたのは、徳江可那子氏の「レクイエム—死の紡ぎ出す風景」。横浜市の元米軍基地敷地に、斎場と墓地を提案した意欲作だ。同賞は、日本女子大学住居学科の卒業・修士制作を対象に、第一線の設計者たちが選定するもの。

公開選定会は、2月21日、同大学目白キャンパス榊溪館3階ワークショップA室にて行われた。選定委員長は山本理顕氏、選定委員は西沢大良氏、藤本壮介氏、林昌二氏、鈴木賢次氏(同大学住居学科教授)、葉袋奈美子氏(福井大学講師・住居学科42回生)。応募者16人のプレゼンテーションの後、一次審査で11作品に絞られ、二次審査での3回の投票を経て、受賞者を決定。総勢160人が、1時間も超過した選定の推移を見守った。

受賞作の徳江氏の作品は、楔型の墓標が連なると、上部が屋

根となり、下部に瞑想的な空間が生まれていくという。「100年の時を経て、徐々に墓地在構造体に覆われる。『時間』に形を与えたかった」というコンセプトが選定委員をうならせた。他の作品で山本氏は、「24時間区役所」案に「オープンスペースが、役所のセクショナルリズムを突き崩す」と評価し、「JR

国立駅前開発の公共施設」案では「敷地を更地にするようだが、地権は複雑。リアルな案でない」など、どの提案にも社会性を求めた。

林氏は全作品に対して「難しい課題に挑戦した大変な力作ぞろい。今年は密度が高く実りが多かった」と、賛辞を送った。



左|徳江可那子氏作「レクイエム—死の紡ぎ出す風景」の模型
右|楔型の墓標が林のように連なる

